

研究の現場から

World Neolithic Congress 2024の参加報告

昨年11月4日から8日にトルコ共和国の南東部にあるシャンルウルファのハラン大学でWorld Neolithic Congress 2024が開催された。コロナ禍後の開放感もあって、63カ国から1000人以上が参加した大きな大会となった。日本からも東京大学を始めとして中近東で調査を行ってきた多数の考古学者の参加があった。

我々はトルコ航空の夜行便でイスタンブールに到着し、そのままシャンルウルファに入った。ところが、シャンルウルファ空港にはスーツケースは届いたもののポスター・ケースが届かず、その場で紛失物届けを出す羽目に陥った。翌日の夕方に市内で参加登録をするとともに、トルコ航空によるポスター紛失を伝えて、前もって大会運営委員会に送付したファイルによって現地でもポスターを印刷する手配をした。しかし幸運なことに、その翌日の昼前に大会会場のハラン大学にポスター・ケースが届き、どうにか日本で印刷した綺麗なポスターを使って発表することができた。

大会初日の午前中には、オーストラリア国立大学名誉教授のピーター・ベルウッドによるキーノート・レクチャー「新石器時代の到来:12,000年間の食料増産による人口増加の歴史」があり、その後、新石器時代に関連して世界レベルのテーマを扱った22セッションと地域レベルのテーマを扱った23セッションに分かれて678件の口頭発表が行われた（写真1）。縄文時代に関連する発表は、東アジア関連の課題を扱ったセッションだけでなく、新石器時代の定義付けをはじめとして世界レベルの課題を扱った複



写真1 オープニングセッションが行われたメインの講演会場

目次

Contents

*研究の現場から.....	1
*特別寄稿.....	2
*新刊紹介／シンポジウム報告.....	4
*黒耀石研究センタートピックス.....	5



写真2 ロシアおよびポルトガルの研究者との意見交換

数のセッションでも取り上げられた。新石器時代の定義付けにおける農耕と狩猟採集といった生業の意味において活発な議論が行われた。初めて新石器時代の国際会議に参加した我々は、縄文時代の研究が新石器時代の研究に大きな影響を与えていることを確認した。

ポスター発表は62件が行われた。ポスター・セッションは昼休み前の短い時間しか枠がなく、また会場も廊下の隅という場所であったため、来場者は参加者に比べて少なかった。しかし、何人かの熱心な研究者との意見交換を行った。とくに縄文時代早期の佐賀県東名遺跡の資料を中心として、^{へんそ}編組製品の写真や模式図を大きく提示した佐々木ほかのポスターは、各地の考古学者の注目を集め、ロシアやポルトガル、ドイツといった地域の研究者から、保存状態や編組技法、他の地域の資料との比較などに関して質問を受けて説明した（写真2）。

国際会議とあって、大会に関連する行事も多数行われた。大会前日の参加登録の日には、その会場でトルコ舞曲のコンサートがあり、隣のホテルで歓迎パーティーが行われた。大会初日には、考古学博物館の前庭で男性合唱のコンサートとレセプションがあり、数多くのトルコ菓子やザクロ・ジュースが提供されたほか、博物館内の見学も行われた。最終日の前日にはお別れパーティーが市内のホテルで行われた。トルコとはいっても南東部はイスラム教の教えを厳格に守っていて、市内に酒屋はあるものの、飲酒

は一般的ではなく、ヒルトン・ホテルで行われたパーティーでのみビールやワインが提供された。

また大会三日目には、参加者全員が五つのグループに分かれて周辺の新石器時代の遺跡をめぐるエクスカージョンが行われた。カラハン・テッペやセフェル・テッペといったシャンルウルファ周辺の100km以内にある6遺跡を丸一日かけて訪問したが、何と言っても大会参加者のお目当てはギョベクリ・テッペであった。しかし、我々が参加したグループは、散々シャンルウルファ周辺の他の遺跡を巡った後の日没直前に、ようやくギョベクリ・テッペに到着することになり、ドームに覆われてライトに照らされた遺構をやっと遠目に眺めることとなった(写真3)。

(能城修一・佐々木由香)



写真3 やっと辿りついた日暮れ時のギョベクリ・テッペ

特別寄稿

隅田祥光 長崎大学准教授
(元黒曜石研究センター特任講師)

シンポジウム

「黒曜石原産地判別法の進展と展望を探る」 (明治大学黒曜石研究センター後援) を振り返る

Cann and Renfrew (1964) に始まる理化学的な黒曜石製石器の原産地判別分析は、1960年代後半には鈴木正男らにより国内でも行われるようになった。1990年代に入ると、エネルギー分散型XRFによるX線強度比を利用した方式が望月明彦と池谷信之により体系化され、日本列島各地の遺跡から発掘された黒曜石製石器の原産地分析が網羅的に実施されるようになった。一方で国外では元素濃度を利用した方式が、特にBrukerが販売しているObsidian Modeを搭載したハンドヘルドXRFの普及によりスタンダードとなり、国内における黒曜石製石器の原産地分析をどのように進展させていくかが大きな課題になった。そこで、2024年11月10日にオンライン方式で「黒曜石原産地判別法の進展と展望を探る」と題する科研費シンポジウム(基盤B、代表:隅田祥光)を開催した(資料1)。このシンポジウムでは隅田祥光(長崎大学教育学部)、島田和高(明治大学博物館)、池谷信之(明治大学黒曜石研究センター)、金井拓人(帝京大学文化財研究所)、脇 幸生(かながわ考古財団)の5名が発表を行い、その後、小野昭(東京都立大学名誉教授)をゲストパネリストに迎え、パネルディスカッションを開催した。なおこのシンポジウムの事前登録者は73名で、約50名が当日のシンポジウムに参加した。

パネルディスカッションでは、はじめに「黒曜石原産地データベースと黒曜石原産地基準試料の整備と利活用」をテーマとした。黒曜石原産地データベースとは隅田が科研のテーマの一つとして取り組んでいるものであり、日本各地の黒曜石原石の波長分散型XRFによる定量分析値を位置情報とともにウェブサイト上で公開している(資料2,写真1)。また黒曜石原産地基準試料とはこれらの黒曜石原石をパッケージとして保管し(写真2)、研究者間での共有や原産地判別を行うための基準試料として利活用することを目指しているものである(資料3)。このテーマの中で、島田は「黒曜石は考古学の共通言語となりうるか?」という話を行なった。考古学におけるグローバルな比較研究は石器の分類体系の違いや考古学的なコンセプトの違いなどにより困難な場

合が多い。一方で、黒曜石研究は石器の原産地推定がベースになることが多く、原産地分析を世界的に標準化することでグローバルな比較研究を行う上での大きなアドバンテージになる可能性がある。黒曜石の基準原石試料をグローバルな視野で整備していくことで、比較考古学研究の対話の促進に繋がる。一方で、原産地分析を行う考古学者の立場から言えば、分析の手順も含めたインストラクションの充実などユーザーフレンドリーであること、利便性を高めた分析のアプリケーションの開発などを求めたい。

次に「望月・池谷方式(強度比方式)と濃度方式のハイブリッド体制」について意見交換が行われた。その中で金井より以下の

写真1 隅田によるObsidian DatabaseのWebsite

提言があった。強度比方式であれ濃度方式であれ、もとはひとつの蛍光X線スペクトルであり、このスペクトルさえ残っていれば、いずれはどちらの方式も使うことができる。また現実的には分析時間が大きな問題になってくる。強度比を利用する場合は1点2分程度であるが（資料4）、定量分析値を利用する場合、正確な値を出すためには1点5分程度の時間がかかる。大量の石器をある期日までに分析しなければならない制約があるような場合は、強度比方式を現実的に使っていくものとする。ただし、濃度方式の利用は考古学的な研究を広げていく上で必要である。状況に合わせてどちらの方式を利用するかを選べる環境が、スムーズに原産地分析を運用していく上ではベストの選択だと考える。

この発言に続いて、協より行政の中では現実的には数万点の石器がある中でそれらを整理する期間、分析して報告書を作成する期間を考えると、強度比方式を用いることが現実的ではある。一方で、報告書にしたデータを利用してもらうことも必要であるため濃度方式ができる環境も必要と感じる。さらに池谷より過去の事例を紹介する中で、分析に関する専門知識のない職員が研究室に行き行って分析を行うようなことがあり、専従で分析の担当者をつけることの難しい状況では、専門的なトレーニングがあまり必要がなくミスも少ない強度比方式の採用が現実的な対応になるという話があった。最後に島田より一台の装置の中でハイブリッド体制が共存できることが重要である。システムを2つ持つことで、時と場合に応じて最適な方式を利用できる環境が、原産地分析を行う立場としては最適であるとの話があった。

パネルディスカッションの最後に「考古学的な黒曜石製石器の原産地分析のこれから」ということで、小野より国内と国外の黒曜石研究のネットワーキングについて以下のような提言があった。実際に会って行うネットワーキングは重要なことである。例えば国内においては民間業者、大学機関、行政機関などが原産地分析を行なっているが、これらの機関でどのようなネットワーキングを構築していくかは、今後、黒曜石原産地の名称問題を解決していくためにも必要なことである。一方で国際的な黒曜石研究のネットワーキングの構築についてはIAOS（資料5）が活用できる。IAOSでは、毎年2回、Bulletinを発行しており、ここで日本の黒曜石原産地に関する最新の情報を提供してみてもどうか？1960年代後半は、国内で確認されている黒曜石原産地は20箇所

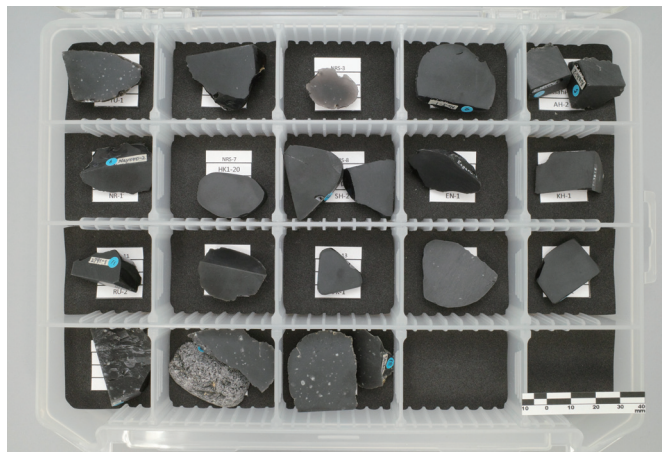


写真2 黒曜石原石の整理・保管状況

程度であった。しかし今は、80箇所以上の黒曜石原産地が確認されている。このために原産地の呼称や原石区分に関する混乱が生じ始めた。しかし、これは黒曜石原産地に関する調査や研究を国内の研究者が丁寧に行ってきた証拠である。黒曜石原産地に関する悉皆調査の重要性などを、IAOSを通して国際的な黒曜石研究のネットワーキングの中で発言していけばよいのではないかと。

シンポジウム終了後のパネリスト間の協議の中で、原産地分析法の教科書的なものを出版してはどうかという提案があった。また日本国内の黒曜石原産地では、原産地と化学組成に基づく原石区分が1:1で対応しない場合が多い。さらに黒曜石の生成場としての一次原産地、一次原産地に由来する原石が集積した二次原産地をどのように区分し、呼称していくかは今後の大きな課題である。黒曜石原産地の基準原石試料を定めながら、国内のネットワーキングを構築し、この課題を一つずつ解決していく必要性を感じた。さらにIAOSを通じた国際的な黒曜石研究のネットワーキングづくりも具体的に進めていくことを検討したい。

【資料】

- 1) シンポジウム趣旨説明の動画：
<https://youtu.be/0fHxvPDmi8E>
- 2) 隅田によるObsidian DatabaseのWebsite：
<https://sites.google.com/view/obsidian/home>
- 3) 基準試料の説明動画：<https://youtu.be/MuvjABk5gRQ>
- 4) 金井による蛍光X線分析による黒曜石の原産地推定の動画：
<https://www.youtube.com/watch?v=y0bmLlew5zk>
- 5) IAOS (International Association for Obsidian Studies)のWebsite：<https://www.deschutesmeridian.com/IAOS/>

シンポジウム『黒曜石原産地判別法の進展と展望を探る』

■日程：2024年11月10日（日）オンライン開催
■主催：科学研究費基盤研究（B）「国際的黒曜石研究拠点（ハブ）の構築：黒曜石原産地判別法の国際標準の導入と新展開」研究代表者：隅田祥光 後援：黒曜石研究センター

■内容

趣旨説明 隅田祥光（長崎大学教育学部）

研究発表

- ・「黒曜石基準試料と標準試料を定める取り組みについて」
隅田祥光（長崎大学教育学部）
- ・「明治大学黒曜石研究センターにおける原産地分析について」
池谷信之（黒曜石研究センター）
- ・「原産地判別図の共有について」
金井拓人（帝京大学文化財研究所）
- ・「基準原石資料を基礎としたp-XRF 原産地分析について」
島田和高（明治大学博物館）
- ・「黒曜石原産地推定に関する調査者の実情」
脇 幸生（かながわ考古財団）

パネルディスカッション

モデレーター：隅田祥光

パネリスト：小野 昭（東京都立大学名誉教授）・池谷信之・金井拓人・島田和高・脇 幸生

シンポジウム報告

資源環境と人類2024 シンポジウム

「黒曜石研究の射程—その拡張をめぐる—」

明治大学黒曜石研究センターでは、その統合的な研究目標である「資源環境とヒトとの関わり」をテーマとするシンポジウムを毎年開催している。今年度は池谷信之の科研費研究（B）「蛍光X線分析装置を中心とした黒曜石原産地推定法の改良・体系化とその可変的適用」に関連して『黒曜石研究の射程—その拡張に向けて—』と題するシンポジウムを開催した。

現在の黒曜石原産地分析では、化学組成の定量値にもとづく推定と原石情報の標準化に向けた新たな取り組みが進んでいる。またこれまでに蓄積した膨大な原産地推定結果にもとづいて、黒曜石の流通や交易にとどまらず、その背後にある社会組織を射程に入れた新たな研究動向も生まれつつある。

シンポジウムでは、列島各地で黒曜石研究を精力的に進める研究者が集い、黒曜石原産地推定の現状と課題、黒曜石原産地をとりまく遺跡の形成と石材流通、黒曜石製石器の形態とそれを支える技術組織などが検討課題となり、さらにそれらを踏まえた黒曜石研究の射程の拡張についても展望した。

また国内における初期の科学的原産地推定の開発に携わった小野 昭先生（元明治大学黒曜石研究センター長）の特別講演を日本旧石器学会の後援のもとに同時開催し、延べで約80名の参加があった。

■会場：明治大学グローバルフロント

■日時：2025年1月25日（土）10:30～16:50

1月26日（日）10:00～16:40

■1月25日（土）

挨拶・趣旨説明 堤 隆

基調講演「黒曜石考古学の射程」 池谷信之

研究発表

- ・「明治大学黒曜石研究センターのWDXRFと黒曜石アーカイブ試料の利用と目的：黒曜石基準試料と標準試料を定める取り組みについて」 隅田祥光（ビデオ発表）
- ・「黒曜石晶子形態による原産地推定の目的と可能性」

中村由克

新刊紹介

『中部・関東地方における縄文時代前期後半の曜石流通—可搬型蛍光X線分析装置の実践事例とともに—』

【本編】池谷信之編，A4，103頁 【データ解説編】保坂康夫編，A4，66頁，データCD付き，出版：ともに明治大学黒曜石研究センター

JSPS 科研費 基盤研究（B）課題番号 21H00599 研究代表者 池谷信之「蛍光X線分析装置を中心とした黒曜石原産地推定法の改良・体系化とその可変的応用」の成果の一部をまとめた冊子が刊行された。この研究の目標の一つは、分析対象と研究目的に応じた原産地推定法を柔軟に選択できる環境を整備し、それに適した分析条件を設定することにある。

縄文時代前期後半は、信州系黒曜石の採取と流通が過剰なまでに増加する時期である。かつて藤森栄一はこの状況を「オブシ



写真1 須藤 隆（COLS）の発表の様子

- ・「広原遺跡再訪—黒曜石原産地推定と人間行動」 島田和高
- ・「船久保遺跡の黒曜石製台形様石器を中心とした石器群について」 麻生順司
- ・「中見代Ⅰ遺跡 BBVI 層出土黒曜石の原産地と接合資料」 池谷信之
- ・「男女倉遺跡—黒曜石原産地をコンテキストとする旧石器時代石器群生成メカニズム—」 須藤隆司

■1月26日（日）

研究発表

- ・「石器技術と石材種—黒曜石の利用動態を探る—」 鈴木美保
- ・「深見諏訪山遺跡の原産地分析と相模野台地における旧石器時代の黒曜石利用」 堤 隆
- ・「細石刃石器群における黒曜石搬入の推移」 青木要祐
- 特別講演『黒曜石研究のこれまでとこれから』 小野 昭

研究発表

- ・「腰岳黒曜石原産地の開発と消費連動」 芝 康次郎
- ・「続縄文社会の変化と黒曜石供給」 大塚宜明

討論 司会：堤 隆

閉会挨拶 池谷信之

※なおこのシンポジウムは「JSPS 科研費 基盤研究（B）課題番号 21H00599 研究代表者 池谷信之」の助成を受けている。また、シンポジウム予稿集と、池谷の基調講演のスライド（pdf）、隅田のビデオ発表は、明治大学黒曜石研究センターのホームページ（<https://www.meiji.ac.jp/cols/>）にてダウンロードないし閲覧可能となっている。（池谷信之）

ディアン・ラッシュ」と、ゴールド・ラッシュになぞらえて表現したことがある。ただし、その黒曜石が「どのように」「どれだけ」消費地である関東地方に供給されたのか、という実証的な研究は「群馬ルート」にほぼ限られていた。もう一つの関東地方への有力な供給ルートと予想される「山梨ルート」については、原産地推定例が少ないこともあり、あまり研究が進んでこなかった。

こうした研究のためには、流通ルート上にある主要な遺跡のすべてを対象として、大量の黒曜石を分析することが有効である。そこで分析に要する時間が短くオンサイト分析も可能な可搬型蛍光X線装置（p-XRF）をこの研究に向けて実戦投入した。主たる対象は、八ヶ岳南麓から甲府盆地を経て西東京に至る地域で、合計20遺跡から出土した黒曜石約10,000点を原産地推定した。

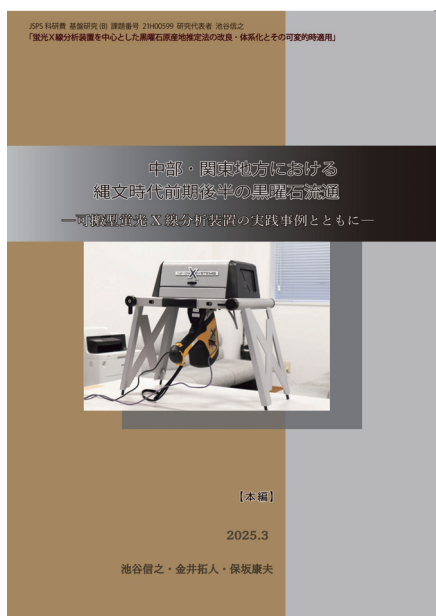


写真1 池谷科研報告書【本編】の表紙

その結果、信州系黒曜石の供給量は甲府盆地を過ぎると急激に減少し、西東京ではきわめて少なくなることが明らかとなった。「山梨ルート」に限れば、「オブシディアン・ラッシュ」は南関東までは到達していない。前期後半、この地域は神津島産など伊豆・箱根の黒曜石の分布範囲となっているのである。（池谷信之）

Yaroslav Kuzmin 著 2024

『Across the Seas in Prehistoric Northeast Asia :

Obsidian as a Commodity for the Study of Human Migrations』

A4変形版, 124頁, Springer, ISBN 978-981-97-5137-2

Yaroslav Kuzmin (Sobolev Institute of Geology and Mineralogy Siberian Branch of the Russian Academy of Sciences) は日本国内でもよく知られたロシアの黒曜石研究者で、COLS のメンバーとも長い交流がある。これまで北東アジアの黒曜石を主な対象とした優れた論文を数多く著しているが、昨年秋にその研究を凝縮した著書が刊行された。この地域の黒曜石研究を理解するうえで、格好のテキストであり、まずは各章のタイトルを紹介する。

1. Obsidian as a Commodity for Studying Prehistoric Migrations, Contacts, and Exchange.
2. Current Methods of Obsidian Provenance and Exchange Studies.
3. Basic Information on Prehistoric Cultural Complexes in Northeast Asia.
4. Obsidian Sourcing in the Southern Russian Far East.
5. Obsidian Sourcing in Korea and Northeast China .
6. Obsidian Sourcing in the Japanese Islands.
7. Obsidian Sourcing in Kamchatka and Northeastern Siberia .
8. Patterns of Human Movements and Migrations in Prehistoric.
9. Prehistoric Seafaring in Northeast Asia: Current State-of-the-Art.
10. Toward an Understanding of Prehistoric Exchange and Contacts in the North Pacific Rim.

本書では黒曜石研究の意義や目的（1章）がまず述べられ、最新の黒曜石原産地推定法、さらにその結果をうけた黒曜石交易の

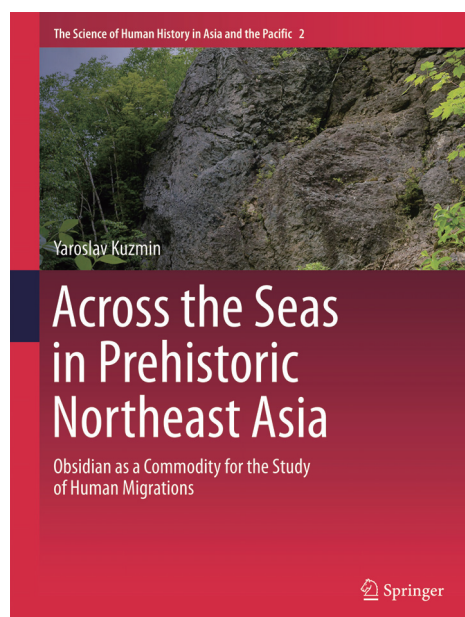


写真2 Yaroslav Kuzmin の著書の表紙

研究法（2章）が紹介されている。続く3章では北東アジアの先史文化が概観され、4章以下では、東北アジア各地域の原産地推定事例にもとづいた研究成果が紹介されていく。

次号のニューズレターでは、彼が最も重視してきた日本列島（6章）およびカムチャッカ半島と北東シベリア（7章）の黒曜石原産地研究の成果について紹介する（続く）。（池谷信之）

黒曜石研究センタートピックス

黒曜石研究センター 研究集会の開催について

黒曜石研究センターでは年に一度研究集会を開催し、構成員の一年間の研究成果を発表する機会を設けている。また発表内容についての分野を越えた議論をととして、構成員の交流を深めるとともに、次の共同研究の発想を得ることも目的の一つとしている。

今年度は猿楽町第三校舎4階を会場とし、11名の口頭発表、7名の紙上発表があった。またオンラインによる一般公開を行ったところ、40名以上の参加者を得た。

日程：2024年12月22日（日）

開場：明治大学猿楽町第三校舎4階 COLS 先史考古学研究室

開催形式：対面、オンライン併用ハイブリッド方式

■口頭発表

- ・「縄文時代後期の社会組織と黒曜石流通」 池谷信之
- ・「サヌカイト・無斑晶質安山岩の原産地推定の可能性」 中村由克
- ・「石器素材としての黒曜石を考える」 鈴木美保
- ・「縄文の編組製品素材加工技術に見る資源利用」 佐々木由香
- ・「細石刃石器群と尖頭器石器群の関係性」 藤山龍造
- ・「東海地方における細石刃石器群の一樣相
一川向東貝津遺跡の接合事例から一」 平井義敏
- ・「AIを用いた被葬者数算出アプリの作成状況について」 谷畑美帆
- ・「鹿児島県始良市前田遺跡における縄文時代中期の木本植物利用」 能城修一
- ・「アラスカ半島ホットスプリング遺跡出土石器群の位置づけについて」 矢島國雄

- ・「遊牧民 or 農耕民？―土器圧痕からみた、東西ユーラシアの穀物が融合した紀元前1千年紀アラル海東部の農耕―」 遠藤英子
- ・「史資料にみる浅間火山噴火と災害環境の描かれ方」 堤 隆
- 紙上発表
- ・「p-XRF化学組成方式による北海道黒曜石の判別と遺物分析」 島田和高
- ・「日本列島の初期石刃技術システム」 須藤隆司
- ・「中部高地における後期旧石器時代の成立とその出現前夜にかかわる石器群の評価」 大竹憲昭
- ・「相模野旧石器時代編年の再構築にかかわる諸問題」 諏訪間 順
- ・「群馬県仙人窟の調査成果について（予報）」 栗島義明
- ・「栃倉式から唐草文系土器へ ―東御市・千曲市出土土器調査から―」 水沢教子
- ・「中国古代印・蛇鈕の型式学」 石川日出志

映画『掘る女 縄文人の落とし物』上映会

映画『掘る女 縄文人の落とし物』（松本貴子監督作；初演2022年）は縄文時代に魅せられ、遺跡の発掘調査現場で働く女性たちを3年間にわたって記録したドキュメンタリー映画である。発掘調査は夏は照りつける太陽の下、冬は冷たい風の中、泥まみれになる、“汚い”、“きつい”、“危険”ないわゆる3Kな仕事である。映画はそんな現場で時に楽しそうに、時に真剣なまなざしで発掘調査を支える女性たちの姿を捉え、彼女たちが何に魅せられて発掘の“現場”での仕事と向き合っているのかを伝えている。

黒曜石研究センターでは考古学に興味を持っているけれども実際にどんな学問なのかよくわからない、という学生にフィールドワークを基本とする考古学のフィールド＝“現場”について知ってもらう契機にしていいただければと、上記映画の上映会を企画、開催した。

■プログラム

日時：2024年12月13日（金）

19：00～21：00 映画上映

21：00～21：30 対談 大竹幸恵 VS 石川日出志

司会 堤 隆

会場：明治大学和泉キャンパス LS101 教室（和泉ホール）



対談の様子（左：石川日出志氏、中央：大竹幸恵氏、右：堤 隆氏）

※大竹幸恵：「掘る女」映画主演，明治大学大学院修士課程修了，考古学研究者

石川日出志：明治大学専任教授，明治大学黒曜石研究センター長

映画はドキュメンタリー映画にありがちな重苦しさはなく、時に精霊のような“縄文人”が登場し、軽快で楽しいBGMも印象的で、発掘現場、考古学の魅力が自然と伝わってくる。

映画の上映後には、主演の一人で本学の卒業生でもある大竹幸恵氏と、本学考古学研究室の主任教授で当センターのセンター長である石川日出志教授との対談が、当センター特任教授の堤 隆の司会で行われた。考古学者のフォーマルウェアである現場着で登場したお二人からは、遺跡発掘現場にまつわる様々なエピソードや、それぞれの現場に対する思いなどが熱く語られた。

特に映画にも登場した国史跡「星糞峠黒曜石原産地遺跡」の20年にわたる調査で、黒曜石の採掘作業に縄文人が使用したと思われる道具の数々が並んで出土した時の感動を伝える大竹氏の言葉には、観客を共感させる力がこもっていた。本遺跡の調査が終了し、現場の上に「黒曜石鉱山展示室 星くそ館」が完成した現在、山のふもとに縄文の村の解明という新たな目標も語られた。

開始・終了が遅い時間であったにもかかわらず、学生を含む70名以上の来場があり、映画上映後の対談にも多くの方々に残っていただいた。考古学のフィールドの魅力を十分に伝えることができたのではないだろうか。（鈴木美保）



『掘る女 縄文人の落とし物』上映の様子

明治大学黒曜石研究センターニューズレター 第22号

発行日：2025年3月21日

編集・発行：明治大学黒曜石研究センター 本部：猿楽町研究室
〒101-8301 東京都千代田区神田猿楽町1-6-3
電話：03-3296-4424

黒曜石研究センター
〒386-0601 長野県小県郡長和町大門3670-8
電話：0268-41-8815
URL: <http://www.meiji.ac.jp/cols/>

印刷：共立速記印刷株式会社
〒102-0072
東京都千代田区飯田橋3-11-24
電話：03-3234-5511



*当センターでは施設の固有名称として「黒曜石」の表記を使用しています。